

縄文時代早期の壺形土器出現の意義

新 東 晃 一

The Significance on the Appearance of Jar-shaped Potteries in Jomon Earliest Period

Shinto Koichi

要旨

縄文土器は、煮沸を用途とした深鉢形の器形が中心であり、台付皿や壺などの出現は縄文時代後期以降とされてきた。ところが最近、南九州地域の縄文時代早期後半頃に深鉢形土器に伴って壺形土器が使用されていることが判明している。さらに、壺形土器は上野原遺跡のように埋納或は埋設されて発見されるという特異な出土状態がみられるものが存在してきた。このような南九州地域での壺形土器の出現と埋納壺及び埋設壺の存在は、南九州地域の縄文時代早期の社会的背景を探る重要な資料になることが考えられる。

ここでは、縄文時代早期の南九州地域の壺形土器の機能や用途と埋納壺及び埋設壺の意義について検討を行った。

キーワード：壺形土器，埋納壺，埋設壺，祭祀

1 はじめに

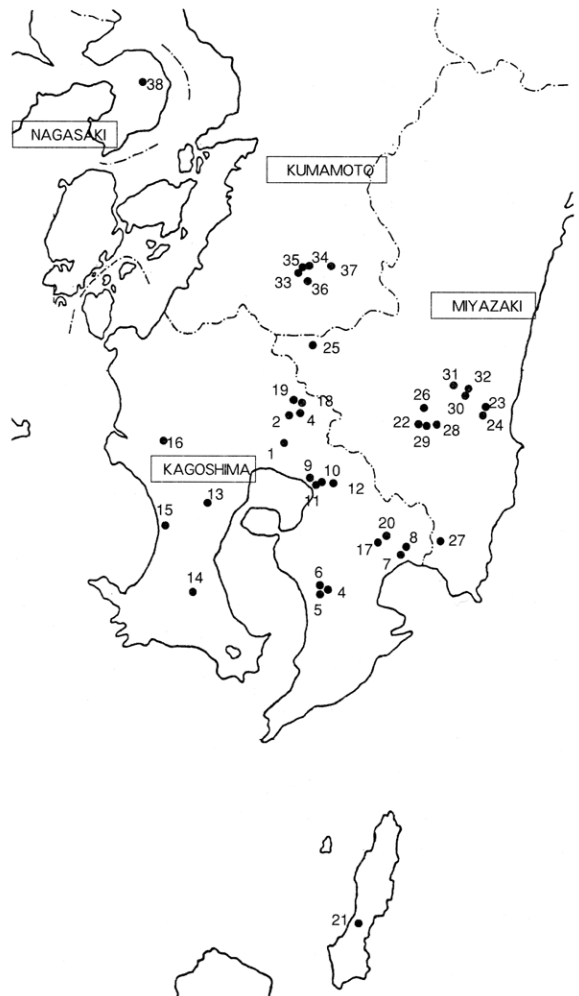
鹿児島県横川町中尾田遺跡の発掘調査で、筆者は縄文時代早期の壺形土器に最初に接する機会を得たが、それまで縄文時代早期には壺形土器の出土例がないことから当時は「壺の形状をした土器」として取り扱わざるをえない状況にあった（鹿児島県教委 1981）。

その後、この壺の形状をした土器は、熊本県球磨郡山江村高城遺跡（熊本県教委 1988）や同村城・馬場遺跡（熊本県教委 1990）などで比較的多量に出土し、壺形土器が縄文時代早期後半の手向山式土器に伴って存在することが判明した。そして、相次いで出土した熊本県人吉盆地内の資料をいち早く検討した「手向山式土器の壺について」の論考が松舟博満氏によって発表された（松舟 1990）。

それ以後、壺形土器は、鹿児島県鹿屋市前畑遺跡（鹿児島県教委 1990）や同県日置郡吹上町塚ノ越遺跡（吹上町教委 1990）などにおいては後続する平椀式土器や椀ノ原式土器¹⁾にもみられ、南九州では縄文時代早期後半の土器型式の深鉢形土器にセットとして継続的に存在していることが判明してきた。

そこで1991年、南九州の縄文時代早期に壺形土器が存在するという特異性に注目し、従来の南九州の縄文観の見直しを迫る事例の一つとして壺形土器の集成を試みた（新東 1991）。

そして、1994年、鹿児島県国分市上野原遺跡の調査において一對の完形の壺形土器を含め、11基12個が埋納或は埋設²⁾されて発見されたが、これは縄文時代早期の壺形土器の存在の意義を考える上で新たな展開を提供することとなった。つまり、上野原遺跡例は、明らかに埋納或は埋設された状態であり、しかも完全な壺形土器が埋納或は埋設



第1図 壺形土器の出土分布図